



Title	言語行動分析のための一試論 : 日本人の言語行動パターンの理解に向けて
Author(s)	前田, 武彦
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 113-130
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4409">https://doi.org/10.18910/4409</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学人間科学部（一九八七年二月）

『年報人間科学』第八号 二三頁—二〇頁

## 言語行動分析のための一試論

——日本人の言語行動パターンの理解に向けて——

前田 武彦

# 言語行動分析のための一試論

## ——日本人の言語行動パターンの理解に向けて——

石田小介が少佐参謀になつて小倉に着任したのは六月二十四日であつた。<sup>1)</sup>

森鷗外の小説「鷄」の冒頭の一文である。一見、平凡ともいえるこの書出しは、しかし作家の堪能の芸を存分に發揮する。

この一文には、いつ、どこで、だが、どうした、という、物語の展開に関する必要十分な情報がすべて盛りこまれていて、しかも文体は簡潔にして明晰、このあとにつづく物語をドラマティックにすら予期させる。この簡黙の美学は少なくとも私にとつての理想である。

ところが、私たちの日常の話しことばを考えた場合、こうした鷗外ふうの明晰な文体にはほど遠く、同じことばを意味なく繰返したり、意味の曖昧な表現を必要以上に使うなど、伝達に必要な語以上の語が使われるのがふつうである（樺島忠夫はこの使用率を冗語率と呼んだ<sup>2)</sup>）。にもかかわらず私たちはふだんの言語生活にとりたて

て不便を感じていないし、それどころか、もし私がふだんの会話に鷗外ふうの理想を貫けば、相手は「簡黙の美に打たれるよりもさきにまづ」<sup>3)</sup>、私が素気ない、冷たい、傲慢だ、といったような印象をもつにちがいない。

書きことばにおける文章と、話しことばにおける発話の構成（話しことばにおける文章）<sup>4)</sup> には、このようにさまざまな違いがあるにもかかわらず、従来の伝統的な言語学では、一般に、前者を研究対象として取りあげることが多く、話しことば、それも日常会話そのものを対象とした文章論的研究はあまり行なわれてこなかった。<sup>5)</sup>

文章論的研究に限らず、人間の社会生活と、そこで現実に使用されることばとの、相互的な関係について広く研究しようとする分野を、一般に、言語生活研究というが、この「言語生活」という概念は、戦後、日本ではじめて作られた言語研究の新しい概念であり、

研究分野でもある。<sup>6)</sup> その意図するところは、私たちが日常生活で経験することばの実態をあるがままにとらえようとすることである。

ところで、言語「生活」という以上、言語を、人間生活の枠のなかでとらえていこうとする立場であることは理解できるのだが、研究の歴史が比較的浅いせいもあつてか、肝心の「言語生活」という

語が一体なにを意味するものであるのか、という定義づけが、研究者間で必ずしも一定していない。そこで、いくつか提起されている諸家の定義づけを整理した柴田武の定義に従えば、「言語生活」とは「言語行動という面から見た人間生活」<sup>(5)</sup>と捉えられる。

この定義に従うと、言語生活研究とは、人間がある時ある時に「言語行動」を、生活全般のなかで集積的にみていくもの、というふうに解釈できるが、では、この柴田の定義にある「言語行動」というのは、どういう行動であると理解したらいいのだろうか。

ところが柴田は、この「言語生活」の定義に際して、「言語行動」という語は何の定義づけもしないで用いている。確かに、柴田に限らず、一般的に「言語行動」という語は自明のものとして、ことさらに定義づけがなされずに使用されることが少なくはない。

そこで『ラルース 言語学用語辞典』<sup>(7)</sup>をみると、日本語の「言語生活」の項目はないが、「言語行動 (comportement verbal/ verbal behavior)」の項目はあって、それは「言語の発話を発信したり理解したりする話し手の活動」のことである。同じ辞典で「発話 (enonce/ utterance)」とは「ある言語の、一人または何人かの話し手が発した、有限な長さの語の連続」のことであるから、先の「言語行動」とは、人間が何らかの言語を、音声にして話したときに、その話すという行動をさす、と捉えられる。従って「言語行動」のなかには例えば、手紙を書く、本を読む、といった行動は含まれないことになる。

ところが、先に柴田武によって「言語行動」という面から見た人間生活」と定義された「言語生活」のなかには、そうした、音声を用

いて話す、という行動以外に、本を読む、勉強をする、ラジオを聞く、という行動、すなわち、話す・読む・書く・聞く、といった行動がすべて含まれているのである。ということは、ここで用いられている「言語行動」という語が、通常の言語学研究で使用される場合の「言語行動」という語とは、異なった意味を指し示している、ということになる。では、柴田武が用いたように、言語生活研究のなかで用いられる「言語行動」とは、どういう意味であるのか。

野元菊雄はいう。

「言語行動」はコトの概念であるから、極めて具体的な営みである。この具体的な場面において、ある言語形式、あるいは言語記号が選択され使用されて、それによって起る伝達行動をいうと考えていい。

「選択」ということを上で述べたが、「選択」である以上、「不選択」ということ、あるいはゼロの選択ということも当然あるのである。これは「非言語行動」と呼ばれることがあるが、「言語行動」との対比によって意味を持つものであり、当然これをも含めて「言語行動」としなければならぬ。…中略…

以上のように考えると、言語音の音波が観察されないとしても、これも「言語行動」とすべきである。こうしてみると、「言語行動」は、言語の有無にかかわらず言語的観点からした「人間行動」である。<sup>(8)</sup>

こうして、「言語行動」という用語が指し示す行動は広範な内容を含んだものとして規定される。(林四郎<sup>10)</sup>、南不二男他<sup>11)</sup>、林大<sup>12)</sup>らは多岐にわたる言語行動を概観するための一種の一覧表を作成している。

ところで、このような言語行動の研究、即ち「言語行動学」は、前述の言語生活研究と深くかかわった、社会言語学の新しい研究領域であるわけだが、それは未だ「発展途上学」(野元菊雄<sup>13)</sup>)であるため(例えば、この学を中心である国立国語研究所が言語行動を主題とした報告書をはじめて出したのが、一九八四年である)、研究の方法論そのものが必ずしも確立しているとはいえない。南不二男は言語行動の研究が展開されていく方向のひとつとして、その理論的モデルを作成することを指摘し、言語行動をかたちづくっている諸要素と、それらを規定する条件を分析して、個々の言語行動を統一的に説明するシステムを考案する必要性をみとめている<sup>14)</sup>。以下では、この南の考えを受けいれ、こうした方向にそって言語行動を多少なりとも統一的に説明するようなシステムを模索していきたい。

そこで本稿は、音声言語行動の会話をとくに分析対象として限定し、分析のための特定の枠組を提起しようとする。そのような分析枠組は、具体的には、会話における個々の発話を分類するための、一種の分類カテゴリー表として提起される。

## 二

末永俊郎によれば、小集団行動の組織的な観察法は、評定尺度によるものと、カテゴリー・システムによるものに二分される。カテゴリー・システムとは「行動の特徴に関する幾つかのカテゴリーを含む一つのセット<sup>15)</sup>」のことである。本稿で提起される会話の分類カテゴリー表とは、このカテゴリー・システムのことに他ならない。あらゆる発話はカテゴリー・システムのなかのいずれかのカテゴリーを与えられることによって、量的に把握されるようになる。

こうしたカテゴリー・システムは社会心理学の分野でいくつか考案されているが、それらのなかでもっとも一般性をもつものとして広く知られているのが、社会学者 R・F・ベールズによるそれである。

ベールズは当初、社会システム総体に関する理論の体系化をめざし、そのための研究手段として、システムとしての小集団における相互作用の問題に関心をよせた。そこで彼は、小集団内に生起する相互作用過程についての体系的で比較可能なデータを得ようとし、しかも、特定の目的で組織された集団にのみ適用できるようなカテゴリー・システムではなくて、より標準的なものを作成しようと考えた。彼は一九五〇年 a の著作<sup>16)</sup>でそのシステムを発表して以来、それを利用した研究をつづけ、のちにはパーソナリティ研究に応用するなど、研究当初には予測していなかった成果を次々と発表し

表1. ベールズの 카테고리・システム

社会的・情緒的領域:	1	連帯性を示す	他者の地位を高める 援助・報酬を与える	←
	2	緊張の解消を示す	冗談をいう、笑う 満足を示す	
肯定的反応	3	同意する	消極的受容を示す 理解する、賛成する、承諾する	←
	4	示唆を与える	指図する 他者に対しては自律性をみとめている	
課題領域:	5	意見を述べる	評価・分析する 感情・願望を表現する	←
	6	方向づけを与える	情報を与える、反復する 明らかにする、確かにする	
課題領域:	7	方向づけを求める	情報・反復・確証を求める	←
	8	意見を求める	評価・分析・感情表現を求める	
社会的・情緒的領域:	9	示唆を求める	指図や可能な行為のしかたを求める	←
	10	同意しない	消極的拒否や形式性を示す、 援助をひかえる	
否定的反応	11	緊張を示す	援助を求める 場から退く	←
	12	敵意を示す	他者の地位をおとしめる 自己防衛や自己主張をする	

鍵: a 方向づけの問題      d 決定の問題  
 b 評価の問題              e 緊張処理の問題  
 c コントロールの問題      f 統合の問題

た。そのためカテゴリ・システムにも、若干の変更がなされることがあったが<sup>10</sup>、ここでは、相互作用過程の分析に広く利用され、よく知られるようになった一九五〇年<sup>11</sup>に発表されたものを表1に示しておく。

表で、各カテゴリの冒頭部に太字で示されている語は、そのカテゴリのいわば見出し項目のようなものである。もともと、表1のカテゴリ・システムそれ自体が、ベールズの考えたカテゴリ項目表の、一種の見出し項目であるともいえる。というのは、彼は、十二個のカテゴリ項目のひとつひとつに対し、かなり詳しい定義をしているからである<sup>12</sup>。それらの定義は多岐にわたって、複雑な内容を包含しているものもあり、表1のカテゴリの見出し項目が必ずしもカテゴリの定義を正確に反映したものとはいえないところもあるが、本稿ではそれは問わないことにする。

さらに、このシステムは、カテゴリ6と7の間にある中央線を境界にして、対称的な位置づけになっている。つまり、カテゴリ6と7は一对のペアとなっていて、同様に、カテゴリ5と8、4と9、3と10、2と11、1と12、がそれぞれペアをつくり、合計六組のペア(a-f)ができています。ベールズはこの六組のペアを、それぞれ、方向づけ・評価・コントロール・決定・緊張処理・統合と名づけたが、これらは相互作用システムが一種の均衡状態<sup>13</sup>に維持されるための、機能要件とみなされる。

ところで、前述の如くベールズのシステムは、小集団内に生じる音声および非音声の相互作用の分析によく利用されたのであるが、にもかかわらず、彼のシステムには、次の二つの弱点(問題点)が存在すると考えられる。のちに言語行動一般を分析するためのシステムを提起するために、彼のシステムの検討からはじめたい。

まず、問題点の一つめは、発話のカテゴリ化に際しての判定の

基準となるべきものが曖昧であり、判定者の考え方によって、判定に大幅な差異が生じ得ると思われる点である。もちろん、複雑多岐な内容と種類をもつさまざまな発話を分析するのであるから、判定者の主観を完全に排除してしまうことは容易ではないだろう。しかしそれも程度の問題であって、例えば、次の対話で、Aはどのカテゴリに分類されると考えられるだろうか。

A (教授) 「君は僕のゼミにはいつも遅刻するようだけど……」

B (学生) 「あの、今朝はちょっと、バスの事故がありました。」

この場合、AはBに対して、君は遅刻常習者である、という事実を言明しているともとれるし(カテゴリ6)、君はまったくいい加減な人間だというような感情をこめて何らかの評価的な意見を述べたともとれるし(カテゴリ5)、次回からは時間を守るように、という示唆を婉曲的にした発言であるとも判断できる(カテゴリ4)。また、Bの応答の仕方を考慮にいと、AはBに、遅刻をするのは何か理由があるのか、というように、事情を尋ねたとも解釈できるし(カテゴリ7)、ゼミに遅れて出てくることに對してBはどういう考えでいるのかと、Bへの反省なり陳謝なりを求めたとも解釈できよう(カテゴリ8)。さらに、状況次第では、Bに對してちょっと意地悪っぽいジョークを言ってみたのだ、とも解せるし(カテゴリ2)、あるいは全く逆に、Bを責めているとも解釈できよう(カテゴリ12)。

こうした多義的解釈・判断を許し得るところ、ベールズのカテゴリ・システムのひとつ弱点の第一点である。

次に、問題点の二つめは、第一の問題点ともいくらか重複するのであるが、そもそも、あらゆる発話を十二個のカテゴリのどれかただ一つだけに対応させること自体が、はたして妥当なことといえるだろうか、という問題である。先のA Bの対話の例でもみたように、発話はしばしば多義的であり、一つの発話を必ずしも一つだけのカテゴリで判断するのが適當であるとはいえない。

実は、一つの発話に對して複数のカテゴリが対応する可能性については、ベールズ自身も認めている。そのうえで彼は、なおも、一発話をただ一つのカテゴリに分類する方法に固執し、その結果カテゴリ化にあたつての基本規則を定めて、一つの発話に複数のカテゴリが競合するときには、カテゴリ・システムの中央境界線から、より遠い方のカテゴリに判定すべきであるとした。<sup>20</sup>つまり、課題領域ではより指令的特質に、社会的・情緒的領域では、情緒のより活動的で外向的な特質に、分析者の注意が向けられなくてはいけない、ということである。

例えば、「今日は暑いですね。」と話しかけられて、ほほえみながら「三十度は超えてますね。」と答えた反応は、カテゴリ6、3、1、のいずれかに分類される可能性があるが、この基本規則の適用によつて、この発話はカテゴリ1に分類されることになる。さらに、前述の対話A Bの例では、Aの発話は結局カテゴリ12に分類されることになる。(ただしベールズはカテゴリ12のもつ強いマイナス・イメージを避けるため、のちにこのカテゴリを「友好的にみえない」という項目に変更している。<sup>21</sup>)

しかし、この規則はいかにも奇妙で、なぜそうするのか、という理由づけに乏しく、先の発話Aがカテゴリー12に判定されることになる論理的な説明が見あたらないのである。この問題は、いいかえると、ベールズのカテゴリー・システムにおいて、課題領域と社会的・情緒的領域との競合が起こった場合に、なぜ、社会的・情緒的領域のほうを優先させなければいけないのか、という問題に帰着する。ベールズはこの問題に対して、論理的な解決策を見出すことなく、しかもなお、あくまでも一発話には一カテゴリーが対応すべきであるという方法にこだわりのつづけ、結局のところ極めて操作的に、先にみたような奇妙な基本規則を定めてしまったのだと考えざるをえない。そこからは、ベールズ自身の社会システム観のなかに、課題遂行の領域と社会的・情緒的な領域とを同次元で考えるという混乱があったのではないか、という疑いさえ生じさせる。課題領域と社会的・情緒的領域とは異なる次元に存在するのであって、課題領域をそのまま延長したところに社会的・情緒的領域が現われてくるのでは決していないはずである。

以上がベールズのシステムのもつ二つの問題点である。これらを克服して言語行動分析に有効なシステムを作成できるよう、次の二節（三と四）でその解決策を考えていきたい。

### 三

本節では、判定の基準が曖昧であるという第一の問題点について

考える。

そもそもこのシステムにおいては、「肯定的反応」「応答」「質問」「否定的反応」の四つの領域は明らかに区別される、という前提があったわけである。アメリカ人であるベールズがアメリカ人の言語行動パターンを念頭において作成したときには、あるいはこのことは明白であったのかもしれない。ところが日本人の言語行動においては、相手への肯定的な反応であるのか、実は遠回しに否定的な意図がこめられているのか、判然としないことはしばしばである。

さらに、相手に質問をしたのか、話し手の意図を述べているのかという、会話進行上の基本的な要件でさえも曖昧なことが多く、一見、相手との対話を装い活発な意見の交換を意図しているようにみえる発言が、実は内容的には相手に反論の余地を与えぬような話し手の一方的な独白に近いものであった、ということは、日本人である私たちにふだんの経験からよく理解できることであろう。（もつともベールズはこの点を全く考慮しなかったわけではなく、彼がこのシステムを用いて、討議集団の問題解決過程における位相の推移に関する仮説を発表したときには、その仮説をみたとす討議の参加者はベールズらと同じ文化に属して、学校教育を受けた英語を話す人たちに限定されている<sup>22)</sup>。）

しかしながら私には、こうした文化論的視点を考慮するまでもなく、このシステムにはそもそも、判定の基準を曖昧にしている本質的な原因があるように思われる。それは即ち、課題領域、社会的・情緒的領域いずれにおいても、発話の内容的側面に比重をおいた、



カテゴリーの細分化のためであると考ええる。

このシステムでは十二個のカテゴリーが六つの機能的問題にまとめられるため、結局、分析観察される相互作用行為が、どの機能要件に対応するかが判断されることになる。しかし小集団内のすべての発話がそれぞれどういう機能をもつかを断言することは難しく、そもそも機能要件を六つ指定したときの分け方の基準となるべきものが、一定していたかどうか疑わしいのである。ベールズは六つの機能要件を二つの領域（課題領域と社会的・情緒的領域）に等分したが、今、それにこだわらずに個々の機能要件をならべて考えた場合、方向づけ・評価・コントロール・決定の四つは要するに、話題の収束に関連づけて、その収束のプロセスにかかわる四つのストラテジーを述べたものといえるであろう。それに対して、緊張処理・統合の二つは、小集団構成員間の対人的諸関係において、連帯の維持にかかわる状態の二側面について述べたものといえる。ということは、これら六つの機能的問題は、話題の収束と連帯の維持という二つの領域について、収束のプロセスにかかわるストラテジーと、連帯が維持される状態という、二つの異なるレベルで論議されていることになる。異なったレベルの問題を同列において細分化したことに、判定の基準を曖昧にした原因があったのだと考える。

そこで本稿では、発話を構成する二つの領域はみとめたうえで、その領域内で、発話がなされて相互作用状況が進行する際の方方向性を問題として取りあげ、その方向性にそって相互作用の安定化（均衡状態）が達成されるときのプロセスを考えようとする。

発話を構成する領域としては、先の議論から明らかなように、「課題 (Task)」領域と「対人関係 (Interpersonal relation)」領域が設定できよう。

課題領域での安定化への方向性とは、話題が収斂していくこと、つまり「収斂性」である。対人関係領域での安定化への方向性とは、会話の参加者たちの間に連帯的關係が維持されること、つまり「連帯性」である。さらに、それらの領域で「収斂性」および「連帯性」での安定化が達成されるときのプロセスは、いずれの領域とも、「恒常的」プロセス・「形成的」プロセス・「帰無的」プロセスの三つが考えられよう。

「恒常的」プロセスとは、その発話がなされる以前の時系列のなかで刻々と展開されていた話題なり連帯的關係なりが、その発話によってもそのまま続行ないし維持されることをいう。「形成的」プロセスとは、その発話によって、それ以前の段階において維持されていた話題や連帯的關係とは異なった、新たな話題や連帯的關係が生成され、提起されることをいう。この場合、以前の話題や連帯的關係が明確に打ち切られ、終了されたうえで、新しい話題や連帯的關係が提起されることもあるし、また、以前の話題や關係をそれほど明確には打ち消さず、いわば複数の話題や關係を共存させるような形で、新しい話題や連帯的關係が提出されることもある。「帰無的」プロセスとは、その発話によって、それ以前の段階において生成・維持されていた話題や連帯的關係が消滅し、しかも、形成的プロセスのように、新しい話題や連帯的關係が生成されないことをい

う。ただしこの場合の「帰無」というのは、以前の話題や連帶的關係について無関心であり、課題の収斂性や対人関係の連帶性といった、領域内の本来の方向性にとって、ほとんど貢献がない、という意味に解されるべきである。

ところで、課題と対人関係という二つの領域は、複数のメンバーによって会話という相互作用が展開されている状況下で、当該の発話が相互作用を進行させるために何をしたか、という側面を問題にしている。つまり相互作用の進行に貢献する発話の「遂行度」が問われている。しかし言語行動の分析にとって、はたしてそれだけで十分といえるのだろうか。この点を考えるに先立って、次の二つの研究を参照したい。

言語学者 R・ヤコブソン<sup>③</sup>は、言語的コミュニケーション（言語行動）の構成要素として、(1)送り手、(2)メッセージ、(3)受け手、(4)コンテキスト、(5)コード、(6)コンタクト、の六つを提起する。そして、(1)～(6)のそれぞれに以下の六つの機能が対応するとする。即ち、(1)情動的機能、(2)詩的機能、(3)働きかけの機能、(4)指示的機能、(5)メタ言語的機能、(6)儀礼的機能。

人類学者 D・H・ハイムズ<sup>④</sup>は、ヤコブソンのその考えを高く評価し、さらにそれを受けて独自の議論を展開する。彼は、ある共同体内の談話の構造（彼はこれを発話機構 *speech economy* と呼ぶ）を考える際に、(一)発話事象 *speech events*、(二)発話事象の構成要素、(三)発話の機能、という三つの位相を分ける。ここで発話事象とは、本稿でいう言語行動に相当し、彼はそうした言語行動を構成する要

素として以下の七つを措定する。即ち、(1)発信者、(2)受信者、(3)メッセージ形式、(4)チャンネル、(5)コード、(6)トピック、(7)セッティング。

(1)発信者は(2)受信者にメッセージを伝達するが、そのメッセージのなかに典型的に見られる形式が(3)メッセージ形式（例・ことば遣い）、発信者と受信者との間にできる物理的・心理的な経路が(4)チャンネル（例・熱心に聞く）である。さらに、発信者と受信者に共通した言語習慣上の体系が(5)コード（例・英語）であり、メッセージの指示する内容事物が(6)トピック、メッセージが伝達される際の状況的文脈が(7)セッティング（例・教会での説教）である。こうした構成要素のさまざまな結合の仕方が言語行動となつて一つのシステムを作るのである。

さらに、ヤコブソンと同じくハイムズにおいても、これらの構成要素はそれぞれが異なつた発話の機能を決定する。即ち、

- (1) 表出的機能
- (2) 指令的機能
- (3) 詩的機能
- (4) 接触機能
- (5) メタ言語的機能
- (6) 指示的機能
- (7) 文脈的機能

である。この(1)～(7)は前述の構成要素(1)～(7)のそれぞれを特定化し、表現しようとする働きのことである。ある発話がなされたとき、七

つの構成要素のうちのいずれが強調されているかによって、その発話の機能が決定されるわけである。

さて、ここで、この七つの機能は先に設定されたカテゴリー・システムの二つの領域のどこに包摂されるかを考えていこう。

まず(6)指示的機能は、話題の内容にかかわるものであるから、発話の課題領域に属するものと考えられる。次に(2)指令的機能は、他者に対して何らかの課題内容を働きかけようとするものであるから、課題領域と対人関係領域の双方にかかわるものといえよう。さらに(4)接触機能は、他者とのつながりについて言及するものであるから、対人関係領域に属するものと考えられよう。

ところがハイムズによる残りの四つの機能(1)(3)(5)(7)については、課題と対人関係の二領域のなかで説明しつくすことはできない。

そこでまず、(7)文脈的機能について考えよう。この機能は、ある発話がどういった場面でなされたか、ということに関して、そうした発話状況のセッティングを特定化する機能であるわけだから、発話の「定位 (Fixation)」の領域にかかわる。これは会話を行なっている当該集団のメンバーたちによって了解されている状況に、発話者が一致しているか否かを分析しようとする領域であり、この領域での安定化への方向性は「状況適合性」であるといえる。

次に(3)詩的機能と(5)メタ言語的機能について。前者は、どういう語法（ことばの使用）がなされていたかというメッセージ形式の特定化、後者はコードの意味の特定化に、それぞれかわるものであるから、この二つの機能は、発話者の話すことばそれ自体への指向

を問題としているわけで、この領域をいま「ことば指向 (Speaking-orientation)」領域と呼ぶことにしよう。これはことば本来の了解事項に基づいて、発話のことば遣いが妥当であるか否かを分析しようとする領域であり、安定化への方向性は、ことば遣いの「妥当性」である。

最後に(1)表出的機能について。この機能は、発話内容そのものに対する発信者の態度の直接的な表現にかかわるものである。従って発話を構成する特定の領域に属するものではなくて、発話者の意図や態度に言及したものであり、発話の全領域で観察することができ

る。

以上、ヤコブソンの説を発展させたハイムズの機能観を検討することによって、新たに「定位」領域と「ことば指向」領域が指定された。

ところで、この二つの領域は、当該の発話が相互作用の進行のために何をしたか、という遂行度を問うのではなくて、むしろ、すでに進行している相互作用状況に対して、当を得た、適当な発話であったか、ということを確認しようとする。即ち、発話の「適性度」を問うのである。しかも、こうした発話の適性度は、当該の発話が安定化への方向性に対して合致しているか、ズレているか、という点に着目するわけであるから、達成のプロセスは二通りである。それを「積極的」プロセスと「消極的」プロセスと名づけよう。

状況適合性を積極的に達成しようとする発話は、状況への関与となり、状況適合性の達成に消極的である発話は、状況からの離脱な

いしは状況不適合となる。後者の場合、メンバーの相互作用を通して刻々とつくられていく場の状況によって要求される内容と、話し手が言わんとする内容との間に、著しいズレが生じているわけである。

さらに、ことは遣いの妥当性を積極的に達成しようとする発話は、普遍的なことは遣いと名づけ、その達成に消極的な発話は、個別的なことは遣いと名づけることにする。ただし、ことは遣いの妥当性という意味を、あまり固定的・静的なものに解釈すべきではない。ことは本来の了解事項といっても、あくまで程度の問題であつて、ふつうの人々の標準的な語法からズレていたらすべて妥当性を欠くというのでは決していない。たいていの人々は、話しことばのうちに多かれ少なかれ、標準的とされる語法からズレた部分をもっている。そこで、例えば冗談を言うときや突発的に感情を表出するときなどに発せられる極端な発話を、個別的なことは遣いとして分類することにする。

#### 四

本節では、一つの発話をあくまでも一つのカテゴリーに対応させる、という第二の問題点について考える。

前述の如く、ベールズ自身が、一つの発話に複数のカテゴリーが競合する可能性を認めているのであるから、問題は、それにいかに対処していくか、という点にしばらくしよう。

言語行動を考える場合、その構成要素と機能との関係は複雑であつて、ある発話のなかで一構成要素だけが強調され、唯一絶対的な機能が決定されるというわけでは決していない。一つの発話に前述した諸機能のすべてがあてはまることすら十分にある。そうした混乱を避けるために、ヤコブソンでは諸機能の「ヒエラルヒー的序列」<sup>25</sup>が考えられた。つまり、たとえ一つの発話に複数の機能が分析されうるとしても、それらの機能はもつとも支配的なものからもつとも従属的なものまで、発話ごとに異なった段階的な系列構造を構成しており、各発話の機能とは、その段階的系列のなかでのもつとも支配的な機能にひとしい、というのである。

しかしながらハイムズは、ヤコブソンのそうしたヒエラルヒー的機能観を否定し、むしろ、諸機能は並列的に布置されうると考える。彼は「発話事象・構成要素・機能」の三つの位相が単線的に結びつくとは考えず、そうした位相間の関係を複合的にとらえ、一つの構成要素が必ずしも一つの機能に対応するのではないことをまとめ、従つて、一つの発話に、支配的な一つの機能が対応するのではないことをみとめる。つまりハイムズにおいて、ベールズ『ヤコブソンらの一発話一機能の考えは根本的に否定され、一発話多機能の考えがとられる。

こうした諸機能の並列性という考えは、発話を同時に複数の側面から分析することの必要性を示唆する。そこで、前節で設定されたカテゴリー・システムにおいては、一つの発話が、相互作用の進行に対する「遂行度」と、相互作用状況にとつての「適性度」という、

二つのレベルから同時に分析されることになる。さらに、遂行度は「課題」領域と「対人関係」領域の二領域から同時に分析され、適性は「定位」領域と「ことば指向」領域の二領域から同時に分析される。つまり、一つの発話が一課題・対人関係・定位・ことば指向一の四領域から分析され、一発話につき四つのカテゴリーが付与されることになる。

以上で言語行動分析のためのカテゴリー・システムが提起された。それを表2に示す。

## 五

そもそもここで提起されたようなカテゴリー・システムは、それを現実の言語行動分析に適用してこそ、その有効性が議論されよう。すでに私は別のところ<sup>(26)</sup>で、買物という日常的な言語行動場面における会話の分析を試み、その際にここでのカテゴリー・システムを実際に利用し、その有効性を確めた。(そのときの分析の実例を表3に示しておく。判定上の細則など詳しくは別稿<sup>(27)</sup>を参照のこと。)そこで本稿では、このシステムを用いることによって日本人の言語行動のパターンがどのように理解できるか、その可能性をさぐっていくことにする。

このシステムはT(課題)・I(対人関係)・F(定位)・S(ことば指向)の四領域のそれぞれから一つずつのカテゴリーが与えられ、TとI領域では分析カテゴリーの選択肢はそれぞれ三つずつ、Fと

表2. 言語行動分析のためのカテゴリー・システム

	構成 レベル	領 域	達成の方向性	評価の基準	達 成 の プ ロ セ ス	分析カテゴリー	略 号
発	発話の遂行度	課 題 Task	収 斂 性	収斂性の有無	恒 常 的	課 題 の 続 行	T+
					形 成 的	課 題 の 提 出	T++
					帰 無 的	課題への無貢献	T-
		対人関係 Interpersonal relation	連 帯 性	連帯性の有無	恒 常 的	関 係 の 維 持	I+
					形 成 的	関 係 の 提 起	I++
					帰 無 的	関係への無貢献	I-
話	発話の適性度	定 位 Fixation	状況適合性	集団による了解状況への発話者の一致の程度	積 極 的	状 況 へ の 関 与	F+
					消 極 的	状 況 離 脱	F-
		ことば指向 Speaking-orientation	妥 当 性	ことば本来の了解事項に基づいたことば遣いの妥当さの程度	積 極 的	普遍的ことば遣い	S+
					消 極 的	個別的ことば遣い	S-

表 4 . 出現比率が高かった  
組合せの上位 5 通り  
(買物場面、発言総数=1000)

	組 合 せ				出現 比率
1	T+	I+	F+	S+	47.2%
2	T++	I+	F+	S+	28.5%
3	T++	I++	F+	S+	7.4%
4	T+	I+	F+	S-	2.8%
5	T-	I+	F+	S+	2.4%

表 3 . 分 析 実 例

緑日 (鉢植えほおづき屋)
客は若い女性、主人は中年男性
客：さあ、どれがいいのかな？ (T++I++F+S+)
主：あのねえ、ここへ下げてあるのはゼーンブ いいの。(T-I-F-S+)
客：いいとこちょうどだね。(T++I+F+S+)
主：だから、いいとこよってよ、お客さんが。 (T++I-F-S+)
客：よるの？ こっちが。マー。(T+I+F-S+)
主：いちいち、あたしが言うの、メンドクせー から。あれだー、これだー、あれだーこれ だーって、よってよ。(T+I-F-S+)
客：これなんか、赤くないもん。赤くなる？ (T++I+F+S+)
…後略…

S 領域では選択肢は二つずつだから、結局、一つの発話に与えられる分析カテゴリーの選択肢の組合せは三十六通りある。さまざまな買物場面での会話を分析した結果、それら三十六通りのカテゴリーの組合せのうち、もっとも多く出現した組合せの上位五通りとその出現比率を表 4 に示す (発言総数は一〇〇〇)。

この表より一課題続行・連帯性維持・状況適合・言語運用妥当性の組合せの出現比率は他に比べて圧倒的に高いことがわかる。この組合せのタイプはもっとも安定的な発話を意味しており、このタイプの発話のやりとりによって、会話は一定の方向性にそって安定的に進行する。ただし、このタイプの発話があまりつづきすぎると、会話はやがて発展性のない膠着状態に陥る。本稿で、会話が均衡状態にあるというのは、会話の進行に伴って特定のタイプの発話が継続的・規則的に出現することをいうのであり<sup>28)</sup>、会話の膠着状態は、相互作用過程のそうした均衡状態を阻害する要因となる。

ところで、T+I+F+S+タイプの出現は確かに多いのであるが、逆に考えると、このタイプ以外の残りの三十五通りのタイプはすべて、安定化達成のプロセスが一樣でないという点でT+I+F+S+タイプと相対しているわけであり、それら三十五タイプを一括して考えれば、両タイプの出現比率はほぼ一対一になる。買物行動という、課題内容が一定している言語行動場面においてこの比率なのだから、他の一般的な言語行動場面では、安定化達成が一樣でないタイプの発話の出現する機会はもっとふえると考えられよう。

また表 4 で、一番目と二番目のタイプは、課題領域のカテゴリー

にだけ差異が生じているのであり、その二タイプを合せると全発言の七割をこす値となる。さらに上位五タイプにおいても、IとS領域でプラス以外のカテゴリが出現しているのが各一つずつ、F領域ではすべてプラス、というように、T領域に比べて他の三領域はその出現パターンが一樣的である。このことから、会話は大部分が一連帯性維持・状況適合・言語運用妥当性<sup>一</sup>の方向で進行しているといえ、課題の収斂性達成のプロセスの変化によって、会話での相互作用状況にさまざまなパターンが生まれていることがわかる。

では、その収斂性達成のプロセスにおいて、問題となるT<sup>++</sup>およびT-カテゴリについて考えよう。

まず、表4の第五番目のタイプにみられるT-カテゴリについて。このタイプの発話は、儀礼的な意味をもった発話に典型的に見出される。例えば、八百屋で客がキャベツを買い、代金を払って帰りがけたときに、八百屋の主人が「はい、どうもありがとう」と言った場合。この発話は、すでに売買が成立したあとのことばであるから、キャベツを売る（買う）という、その場面での本来の課題に対しては何ら貢献していないのであるが、八百屋の主人と客との連帯性は恒常的に達成されており、また、この場面の状況適合性<sup>二</sup>とことば遣いの妥当性も積極的に達成されていて、二人は友好的な連帯性を維持したまま別れていくわけである。

ただしこのタイプは儀礼的な言語行動にのみ限られるのではない。課題の恒常的な収斂性が重視されない、という点で、次のT<sup>++</sup>カテゴリの出現事情と似た側面をもつ。そこで、次にT<sup>++</sup>カテゴリに注

目しよう。

収斂性の達成が形成的プロセスによる場合、それ以前の話題が明確に打ち切られて新たな話題が提出されるときと、以前の話題を明確には打ち消さず、複数の話題の共存的な形で新たな話題が提出されるとき、二種の様式があることはすでに述べた。しかし日本人の言語行動においてもっとも多くみられるのは、むしろその二様式の融合形であるように思える。つまり、以前の話題を打ち切って新たな話題を提出するのだが、その打ち切り方が明確な形ではなされず、暗黙のうちになされる、という様式である。例えば、次の対話。

A（教授）「君はこのところ論文も書いていないようだし、結婚をひかえて勉強もできずに、毎日、浮かれてるんじゃないかね？」

B（学生）「いやあ、結婚というのがこんなに大変だとは思ってませんでした。きのうも、新居さがして、一日じゅう不動産屋めぐりですよ。」

この対話では、Aの質問意図は、君は最近浮かれて勉強していないのではないか、ということである。それに対して、Bは例えば、

C「ええ、たしかに結婚前で毎日浮かれていて、勉強なんて手につきません。」

というような直接的応答（課題の続行）はしていない。Bは、結婚前の準備というのはこんなにも大変なんだ、という新たな話題を提出することによって、Cの答えを暗黙のうちにAに了解させているわけである。Aの質問内容は帰無的プロセスによって終了されたわ

けであるが、それは発話として音声化されていない。また一方、Aの方でも、決してCのような応答は求めていない。この場合Aは、自分の質問内容が打ち切れ、Bのような新たな話題が提出されることを予期しているのであり、その意味でここでのBの応答は状況適合性をもっている。教師と学生のあいだのふつうの言語行動のパターンとしてはCは不適である。しかし論理的にはAという質問にはCが対応するはずで、BはあくまでもCの言いわけにすぎない。

「イギリス人は歩きながら考える。スペイン人は走ってしまつてから考える。ドイツ人は考えてばかりいて歩き出さない。日本人は言いわけをしながら歩く。」<sup>29</sup>とは至言であるが、日本人の言語行動ではその言いわけBのほうが、直接的応答Cよりも、学生Bばかりか質問者Aにさえも受容され容認されるであろう。このことは、話題の収斂性が恒常的に達成される必要のないことをよく物語っている。

しかしながら、言語行動におけるそうした言いわけ型コミュニケーションにおいては、課題領域の収斂性が無いというのでは決しない。収斂性は、新たな課題の提出という形成的プロセスによって達成されるのである。従つて、話題の続行による収斂性の達成でないという意味では、「対話性」<sup>30</sup>が稀薄なのだともいえる。しかしそれは「相手との対立を避け、相手と共感し合うことが核になっている」<sup>31</sup>日本人の言語行動のパターンであつて、発言はしばしば独白的であり、しかもなお収斂性をもつ。ここでは「互いの独白を、互いに理解し合い、ともに共鳴し合う」<sup>32</sup>ことが重要なのである。

ところで、このように、形成的プロセスの連鎖によって収斂性を

達成する、という言語行動パターンの原型は、どこに見出すことができるだろうか。私はそれが、村の寄りあいにあるのではないかと考える。中野収<sup>33</sup>の言うように、村の寄りあいでは、ひとりひとりの発言はあつても、それぞれの自己主張をぶつけ合う対話が行なわれることは少ない。対話の折り重なりではなくて、ひとりごと、つまり独白が連鎖して、全体として、ある構造——考え方の分布状態——がつくられる。

こうした寄りあいの例を宮本常一から引用しよう。長崎県対馬での話である。

いってみると会場の中には板間に二十人ほどすわつており、外の樹の下に三人五人とかたまつてうずくまつたまま話しあつている。中略：「九学会連合の対馬の調査に來た先生が、伊奈の事をしらべるためにやつて來て、伊奈の古い事を知るには古い証文類が是非とも必要だというのが、貸していいものだろうかどうだろうか」と区長からきり出すと、「いままで貸し出したことは一度もないし、村の大事な証文書類だからみんなよく話しあおう」ということになって、話題は他の協議事項にうつった。そのうち昔のことをよく知っている老人が、「昔この村一番の旧家であり身分も高い給人（郷士）の家の主人が死んで、その子のまだ幼いのがあとをついだ。するとその親戚にあたる老人が來て、旧家に伝わる御判物（ごはんもの）を見せてくれといつて持つていった。そしてどのよう

に返してくれとたのんでも老人はかえさず、やがて自分の家を村



一番の旧家のようにしてしまった」という話をした。それについて、それと関連あるような話がみんなの間にひとわりせられてそのまま話題は他にうつった。しばらくしてからまた、古文書の話になり、「村の帳箱の中に古い書き付けがはいっているという話はきいていたが、われわれは中味を見たのは今が初めてであり、この書き付けがあるのでよいことをしたという話もきかない。そういうものを他人に見せて役に立つものなら見せてはどうだろう」というものがあつた。するとまたひとしきり、家にしまつてあるものを見る眼のある人に見せたいへんよいことがあつたといふいろいろの世間話がつづいてまた別の話になつた。…中略…  
 いかにものんびりしているように見えるが、それでいて話は次第に展開して来る。一時間あまりもはなしあつていると、私を案内してくれた老人が「どうであらう、せっかくだから貸してあげては……」と一同にはかつた。…中略…話の中にも冷却の時間をおいて、反対の意見が出れば出たで、しばらくそのままにしておき、そのうち賛成意見が出ると、また出たままにしておき、それについてみんなが考えあい、最後に最高責任者に決をとらせるのである。これならせまい村の中で毎日顔をつきあわせていても気まずい思いをすることはすくないであらう。<sup>(3)</sup>

こうした寄りあいでは、以前の話題は打ち消されずに複数の話題が共存しているのだとも考えられるが、また一方、最終的に取り決めた事項は一つなのだから、それに直接関係しない発言は暗黙の

うちに打ち消されつつ、ゆつくりとしたプロセスをたどつて、収斂性に向かつていとも考えられよう。

以上、本稿での考察の対象は日常的な言語行動場面に限られていた。今後、非日常的な場面をも分析の対象とすることによって、日本人の言語行動パターンの理解に役立つ道がさぐられるものと考えらる。

#### 注

- (1) 森鷗外「鷗」一九〇九年 引用は『鷗外選集 第二巻』岩波書店 一九七八年 二四四頁
- (2) 樺島忠夫「言語行動における制御の問題——言語行動の法則性というところ——」京都大学文学部『国語国文』二五巻二号 一九五六年
- (3) 丸谷才一「文章読本」中央公論社 一九七七年 一〇九頁
- (4) 南不二男「日常会話の構造——とくにその単位について——」『言語』一卷二号 一九七二年
- (5) 柴田武「日本人の言語生活」大野晋・柴田武編 岩波講座日本語第二巻『言語生活』所収 岩波書店 一九七七年 および同書のまえがき  
 Takeshi Shibata, "Sociolinguistic surveys in Japan: approaches and problems", *International Journal of the Sociology of Language*, 55, 1985  
 真田信治・柴田武「日本における社会言語学の動向」特定研究(一)『學術研究動向の調査研究』報告書 一九八二年
- (6) 柴田武「日本人の言語生活」前掲論文 三九頁
- (7) 『ラールス 言語学用語辞典』(伊藤見 他編訳) 大修館書店 一九八〇年
- (8) 野元菊雄「言語行動様式の対照研究について」国立国語研究所報告八〇『言語行動における日独比較』所収 三省堂 一九八四年 一一二頁
- (9) 林四郎「表現行動のモデル」『国語学』九二集 一九七三年  
 林四郎「言語行動概観」南不二男編 講座言語第三巻『言語と行動』所

収 大修館書店 一九七九年

- (10) 南不二男・江川清・米田正人・杉戸清樹「談話行動の総合テキストについて」 国立国語研究所報告六五「研究報告集2」所収 秀英出版 一九八〇年
- (11) 林大・芳賀純・林四郎「座談会 言語行動を考える(一)」 『応用言語学講座 月報1』所収 明治書院 一九八五年 のなかで林大によって個別の言語行動の目録 名目表」が提起されている。
- (12) 野元菊雄「言語行動のひろがり」 林四郎編 応用言語学講座第三巻「社会言語学の探求」所収 明治書院 一九八五年 一一九頁
- (13) 南不二男「言語行動研究の問題点」 南不二男編「言語と行動」前掲書 所収 一九七九年
- (14) 末永俊郎「集団行動の測定法」 千輪浩監修「社会心理学」所収 誠信書房 一九五七年 一一七頁
- (15) Robert F. Bales, *Interaction Process Analysis — A Method for the Study of Small Groups*, Addison-Wesley Press, 1950a
- (16) もともと、ベールズが一九五〇年aとそのシステムを発表するに到るまでのそれ以前の研究の途上でも、すでに何度もの改訂がなされていた。
- (17) Robert F. Bales, "A Set of Categories for the Analysis of Small Group Interaction", *American Sociological Review*, vol. 15 no. 2, 1950b
- (18) R. F. Bales, 1950a, op. cit., appendix を参照
- (19) 二つの均衡状態というのは、完全な課題解決過程において、各位相が規則的なパターンをもって強調されていく、継続的な過程の展開を要す。R. F. Bales, 1950a, op. cit., p. 10 を参照
- (20) R. F. Bales, 1950a, op. cit., pp. 92—93
- (21) Robert F. Bales, *Personality and Interpersonal Behavior*, Holt, Rinehart and Winston, 1970, pp. 474—475
- (22) Robert F. Bales and Fred L. Strodtbeck, "Phases in Group Problem—Solving", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 1951
- (23) Roman Jakobson, "Linguistics and Poetics", in Thomas A. Sebeok(ed.) *Style in Language*, the M. I. T. Press, 1960

- (24) Dell H. Hymes, "The Ethnography of Speaking", in Joshua A. Fishman(ed.) *Readings in the Sociology of Language*, Mouton, 1968 (初出 1962)
- (25) R. Jakobson, 1960, op. cit., p. 353
- (26) 拙稿「日常的言語行動場面における会話分析」 昭和六〇年度大阪大学大学院人間科学研究科修士論文 なおこの一部は稿を改めて発表の予定
- (27) 前注(26)を参照
- (28) 前注(19)、ベールズによる均衡状態の定義を参照
- (29) 例えば、芳賀純「話せばわかる」か 日本人の意識と表現」 講談社 一九八五年 三三頁に紹介されている。
- (30) 中野収「コミュニケーションの記号論 情報環境と新しい人間像」有斐閣 一九八四年(初出一九七八年) 一〇頁
- (31) 直塚玲子「欧米人が沈黙するとき——異文化間のコミュニケーション——」 大修館書店 一九八〇年 一六四頁
- (32) 直塚玲子 同書 同頁
- (33) 中野収 前掲書 一一頁
- (34) 宮本常一「忘れられた日本人」 一九六〇年 引用は、岩波文庫 一九八四年 一三、一四、一五、二〇、二二頁